

マングローブをめぐる利用と保全の展開 Shifting mangrove usage and its conservation

増田 和也 (高知大学)

MASUDA Kazuya (Kochi University)

インドネシアにおけるマングローブ林消失の主たる要因として、製炭業とエビ養殖業が挙げられる。インドネシアにおけるマングローブ製炭業は遅くとも 20 世紀初頭には成立しており、その生産地の中心はスマトラ東岸であった。製炭業の成立は都市と関係しており、生産された木炭はシンガポールへと運ばれた。製炭業は現在も存続し、東アジア諸国や中東に輸出されている。

一方、マングローブ林の養殖池への転換は、古くからジャワ島北岸でミルクフィッシュ養魚のためになされてきた。しかし、養殖池開発が拡大するのは、輸出用のエビ養殖が始まる 1970 年代以降であり、やがて開発ブームは外島へも広がっていった。集約的な養殖池は人工飼料や抗生物質の多用により荒廃し、放棄池も少なくない。

インドネシアにおけるマングローブ林管理は 1930 年代に始まる (Kusmana 2014)。当初は利用を前提とした管理であったが、やがて生物生息空間の保護を目的として、伐採を禁ずる保護区が制定されるようになり、1990 年代後半には保護区以外でもマングローブ原生林の伐採が規制されるようになった。こうした「切らない」かたちの保全に加え、2000 年代以降は植林によるマングローブ林修復も進められている。

後半では、交易品としてのマングローブ炭に焦点を当て、日本との関係を交えながら、その歴史的変遷をみていく。今日、日本はインドネシア産木炭の主要な輸入国の一つである。日本では、1960 年前後の「燃料革命」により国内での木炭生産が激減したものの、1980 年代後半からのグルメブームを背景に木炭消費量が上向くと、海外からの木炭輸入が伸びるようになる。2000 年代にそれまでの主たる輸入先であった中国が自国産木炭の輸出を全面規制すると、日本の木炭輸入先はマレーシアとインドネシアへと移る。インドネシアでは、マングローブ林保全の気運が高まるなか、基本的には製炭業を規制する方向にある。一方、マレーシアでは徹底した管理下で育成されたマングローブ二次林から木炭を生産し、認証制度を活かしながら日本へ輸出している。こうした 2 つの製炭業を示しながら、マングローブ林のガバナンスについて考えてみたい。

参考文献

Kusmana, C. (2014) 'Distribution and Current Status of Mangrove Forest in Indonesia', in Faridah-Hanum et al.(eds.) *Mangrove Ecosystems of Asia: Status, Challenges and Management Strategies*. Springer: p.37-60.